

埼玉育ちのグローバル人



田舎学生の夢「グローバル企業を創る！」

第1回 18歳の初海外で人生180度転換

株式会社デジタルベリー 赤羽根 康男さん



「自己紹介」

はじめまして。浦和（埼玉県）で株式会社デジタルベリーという IT ベンチャー企業を経営している赤羽根康男（40歳）と申します。

栃木県生まれ、埼玉大学卒業。岩谷産業という商社に5年間勤務し、27歳の時に学生時代からの夢であった起業をしました。

創業当時は売上がまったく立たず、創業時に300万円あった貯金残高が8000円になり、倒産を覚悟したこともありました。その後、「インターネット上でカタログをぺらぺらめくる」デジタルカタログと出会い、ニトリ様など1000社以上（国内業界3位）のお客様に導入、埼玉県から「渋沢栄一ビジネス大賞特別賞」を頂き、今では社員数18名に成長しました。

しかし、18歳当時の私は栃木県を出たこともほとんどなく、大人しく引っ込み思案で保守的な性格でした。それから数々の海外での出会いを経て、まさかこうして自分が起業して会社を引っ張る立場になるとは夢にも思いませんでした。

私の人生は18歳の初海外経験から180度変わります。初海外で自分の視野の狭さを痛感し、学生時代はアルバイトでお金を貯めて、長期休暇ごとに海外を訪問しました。そこでの多くの出会いによって視野が広がり、価値観が変わっていきました。高校時代は牧瀬里穂さんというアイドルが好きなことからCM作りに興味を持ち、大手広告代理店に入るのが目標でした。その夢は海外経験

の数々によって、「海外で働くこと」と「起業をすること」に変わっていきます。そして現在、2つの夢のうち1つは実際に叶えることができました。私を信じてついてきてくれる社員達と働くことができ毎日がとても充実しています。

今回、「グローバル人材」のエッセイを書いてほしいとお声がけ頂いた際、現在の自分はとても「グローバル人材」と言えるような人間ではないですし、過去にエッセイを綴られた皆様のような仕事上の海外経験は書けないのでお受けすべきか悩みました。ただ、私は海外に行ったことから人生が好転していったのは事実ですし、私のこれまでの経験をありのままにお伝えすることで少しでもお役に立てることがあればと思い、このたびエッセイを綴らせて頂くことになりました。こうして文章を書くのは初めての経験で読みにくい表現が多く恐縮ですが、これまでに感じたことをありのままに書かせて頂きますので、お付き合いいただければ幸いです。



写真1：デジタルベリーの社員と

「引っ込み思案の性格を変えたかった初海外」

高校生までは大人しく自己表現が苦手な学生でした。コンプレックスが多く、何かと後ろ向きな考え方をする自分が好きになれませんでした。

そんなある日、本屋で「留学ジャーナル」という雑誌を見つけました。栃木県で生まれ育ち、自分も親も友人も海外経験がある人と話したこともなく、外国人といえば中学時代の臨時英語講師ぐらいしか話したことが無い「超保守的」な自分にとって、海外に行くというのはあまりに未知なことでした。最初に訪問することになるアメリカに対しては、「銃で撃たれたらどうしよう」などと思ってました。知らないことから来る偏見は本当に怖いことです。

とにかく自分を変えたいという思いが強く、その場で親に電話して「夏休みに留学したいからお金を出してほしい」と頼みました。私の人生はここから180度転換していくことになります。



写真2：アメリカ短期留学

「衝撃の連続のアメリカ初訪問【18歳】」

1995年、雑誌「留学ジャーナル」でアメリカのロサンゼルスに2週間の短期留学に行くことになりました。アメリカのロサンゼルスを選んだのは、「海外と言えばアメリカ」としか知らなかったこと、ちょうど初の日本人メジャーリーガー野茂英雄選手が、ロサンゼルスドジャースで活躍していた年で、ロサンゼルスに親近感があったからと、すごく安易な発想でした。

2週間のホームステイと語学留学プログラムに

参加したのですが、初めて降り立った海外では見るもの1つ1つに刺激されました。一番衝撃だったのは、乗り合いバスに乗った時、停留所で車イスに乗ったおばあちゃんが待っていたのですが、乗客の多くが我れ先にと助けに行き、乗客全員でおばあちゃんを助けていたことです。当時の日本では電車などで老人が立っていても譲る文化が無い時代でしたので、「なんて進んだ国なんだろう！」と衝撃を受けました。

もう1つ大きな刺激だったのが、アメリカでは自ら話せない人は評価されないことです。日本では遠慮することが美德とされる文化がありますが、アメリカでは自ら話そうとしない人は全く評価されない文化でした。引っ込み思案が許されないこの国で自ら積極的に話し、考え方を伝えることでお互いを理解しあえることが分かりました。

また、留学していた日本人学生との出会いも刺激的でした。当時の自分の周囲にいた友人たちとはまったく違う広い視野と向上心を持った多くの日本人留学生との出会いによって、「大学時代に海外にたくさん行き、たくさん文化を見て、自分をもっと高めたい。」と思うようになりました。

(余談ですが、この時に出会った日本人の女子留学生が好きになり、帰国後にデートしましたが振られてしまいます。男子校出身の自分にとっては初めてのデートと失恋でしたが、そんな意味でも初海外が全ての転機になりました。当時、海外留学する日本人学生のうち、女性が8割以上だったので、男子校出身で女性が苦手だった自分にとってはそういう意味でも色々な考え方を学ぶことができました。余談で失礼いたしました。)

「タイでの起業のきっかけになる出会い【19歳】」

学生時代に打ち込むべきことが明確になり、また海外に行くためにアルバイトに打ち込みました。先進国の次は発展途上国を見てみたいと思いました。

どこに行ったらいいかまったく分からなかったので、大学生協の旅行受付に行き、「発展途上国で国境を超える旅行を一人でしたいのですが、どこかいいところはないですか？」と聞いたところ、「タイからシンガポールの鉄道旅行はどうですか？」とお勧め頂き、行くことにしました。

タイの空港に一人到着した私は、発展途上国の空気に圧倒されてしまいます。泊まる宿も決めずに来てしまった私はすごく不安になり、日本語で声をかけてくれたタクシー運転手の男性の方についていってしまいました。一日中、色々なお土産屋さん連れて行かれてしまい、自分の未熟さを痛感し、海外を一人で旅することを甘く考えていたことを反省しました。

しかし、カオサンロードという世界中の旅行者が集まる通りに行き1週間もすると、50円で美味しい屋台のチャーハンが食べられて、100円でバイクタクシーに乗ってどこにでも行ける気楽な一人旅にはまっていきました。

ここで起業のきっかけになった早稲田大学の4年生の先輩との出会いがありました。その先輩は就職活動でベンチャーキャピタル（ベンチャー企業へ投資する金融機関）に内定していました。大手企業の内定を数々断って、この会社に入るとい先輩は「赤羽根君、これからはベンチャーの時代だぞ。大手企業に行くよりも会社を立ち上げて成功するの方がカッコいい時代だ」と言っていたのが印象的でした。それから少しずつ起業に興味を持つようになっていきました。

（余談ですが、起業して3年目にこのベンチャーキャピタルから「御社に投資をしたい」と声をかけてもらいました。当時の先輩の話をしたところ、先輩と再度つながることになり感動しました。）

タイから、シンガポールに南下するはずだった東南アジア旅行は、急転してトラブルに巻き込まれ、強制帰国することになります。タイに慣れて油断していたせいで、乗り合いバス乗車時にパスポートを盗まれてしまいました。1ヶ月だった旅行の予定は急きょ2週間で終わってしまいました。大学の友人達からは「怖かったから早く帰ってきたんだろ？」と笑われてしまいました。



写真3：タイ1人旅

（第2回に続く）